

# 物神性論による古典派経済学批判

A Criticism of the Classical Political Economy from the View Point of Fetishism

奥山 忠信

OKUYAMA, Tadanobu

## 要 旨

物神性とは、石や木などを神として崇める宗教形式である。マルクスは、物神性が資本主義のシステムを支えているとして、この問題を論じている。資本主義に生きる人々の当事者意識は物神性に陥っており、資本主義の歴史性を認識することで、物神性から脱却することができる、と考える。古典派経済学は、資本主義の本質に迫るという多大な貢献をなしたにもかかわらず、最終的には物神性から脱却できていない。ここに物神性論の視点からのマルクスの古典派経済学批判がある。

## Keyword

物神崇拜、資本論、古典派経済学、私的労働、取り違え

Fetishism, Capital, Classical Political Economy, Private Labour, quid pro quo

## 序 言

本稿は、政策科学学会第10回大会（2017年9月24日）における報告「物神性論の形成」をベースにした報告論文である。

大会での報告のうち、マルクス（Karl Marx, 1818–1883）における物神性論の理論形成史の部分に関しては、「物神性論の形成」（奥山 [2017]）に公表してある。このため、本論文は、第1に、理論形成史に関する前掲拙論を補強し、第2に、物神性論のマルクス経済学における理論的意義を踏まえて、物神性論の視点からのマルクスの古典派経済学批判を考察したものである。

物神性とは、石や木などの物を神として崇めることを言う。呪物を崇拜する原始宗教ではあるが、慣習としても宗教としても、今に受け継がれている。マルクスは『資本論』第

I部「資本の生産過程」第1章「商品」第4節「商品の物神的性格とその秘密（Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis）」において、資本主義経済のシステムが物神崇拜に支えられたシステムであることを論じている。

ところで、『資本論（Das Kapital）』のサブタイトルは、「経済学批判（Kritik der Politischen Ökonomie）」である。この場合の「経済学」とは、先行の経済学とりわけ古典派経済学である。マルクスは、古典派経済学から経済学を吸収すると同時に、批判して自らの体系を作っている。マルクスは、古典派経済学には多大なる敬意を払いつつ、これを批判しているのである。

古典派とは別に、マルクスが「俗流経済学」と呼んで批判する一群もある。マルクスの区分では、古典派経済学は、資本主義の本

質に迫りつつ限界を持った学派であるが、俗流経済学は資本主義の本質を追求することなく現象のみを追いかけた学派である。とはいえ、俗流経済学は、資本主義の当事者意識を反省することなく受け止めていたと言う点では、批判の対象としてはっきりしており、この点で重要な役割を果たしている。いずれにしても、「経済学批判」は、マルクスにとって一つの研究手法であったと言える。

古典派経済学批判と物神性論とは、どこで関わるのか。マルクスは、古典派経済学は、最終的には資本主義の物神的性格を見抜けなかった学派であると批判していたのである。資本主義経済の中にいる当事者は、物神性にとらわれて資本主義を自然な永遠の経済システムとみなす。そして、資本主義経済を研究対象としている古典派経済学もまた、資本主義の本質に迫る功績を上げたにもかかわらず、資本主義経済の当事者と同じ意識から脱却できなかつたと批判しているのである。

## 1 物神性と資本主義の当事者意識

物神性とは、木や石などを信仰の対象とする呪物崇拜の宗教である。マルクスは資本主義経済の特徴の一つとして、これを指摘したのである。資本主義は発展した経済システムであるが、その中に、原始宗教と類似の仕組みが組み込まれているということである。

机や金は、ただの自然的な存在であるが、それらが商品や貨幣となると、たんなる物ではなく社会関係を担ったものとして、資本主義経済の中心に躍り出る。商品と貨幣からなる市場なくして資本主義経済は成り立たない。商品や貨幣という「物」が人間を支配するシステムが資本主義である。抽象的に言えば、人と人との関係が物と物との関係として現れ

る経済の仕組みが資本主義経済の特徴となる。

貨幣としての金は、金の生身の自然素材そのもので一般的購買力をもつ。机は物としては机としての自然形態を持つだけであるが、価格を付けて商品として登場すると、資本主義的な富の基礎的な存在となる。自然素材が社会的な機能を果たすようになるのである。貨幣や商品が人の統制を超えて人々を支配する。

社会システムは変えられるが、自然は変えられない。資本主義経済における物神崇拜は、社会的なものが自然的なものを取り違えられることで資本主義に正統性を与える。自然的なものが社会的な機能を果たし、社会的な機能が自然的なものから生じるかのように認識される。これによって、資本主義が自然的なものであり永遠に続く体制として受けとめられるようになる。

この認識からは、資本主義の階級社会としての性格も資本主義経済が経済の歴史的な一定の発展段階の中で生まれ、いずれは死滅するという唯物史観のような歴史認識は、生じない。資本主義社会の当事者は、唯物史観とは無縁の意識の中にある。物神性論は、商品や貨幣を当然のこととして受け入れる当事者意識をその根拠から説明し、特定の歴史的な一社会である資本主義が自ら作り出す普遍的な正統性とその虚構を解き明かす論理である。

この論点は、『資本論』の中では、異質の論点である。『資本論』は、言うまでもなく社会主義を説いた思想書ではなく、資本主義を分析した経済学の研究書である。しかし、物神性論に関して言えば、事情は異なる。マルクスの思想を経済理論として説いているという意味で、思想と理論が一体化した研究領域である。

古典派経済学から学ぶという点では、マルクスは古典派経済学の申し子である。しかし、マルクスから見た古典派経済学の限界は、資本主義経済の歴史的性を認識できなかった点にある。この点が物神性論と関わる。すなわち、古典派は資本主義に生きる人々の当事者意識から脱却できなかった、ということになる。

## II 物神性論の形成

### 1. 疎外論の中の物神性論

マルクスの青年期は、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831) 哲学に批判的なヘーゲル左派のグループの影響下にあった。このグループの代表者の一人がフォイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach, 1804–1872) である。マルクスは、『独仏年誌』に執筆した「ヘーゲル法哲学批判 (1844)」(Marx [1956]) において、フォイエルバッハの疎外論による宗教批判を支持し、疎外論に導かれて研究の途に就いた。『経済学・哲学手稿 (1844)』(Marx [1968a]) では、初期マルクスを代表する有名な労働疎外論を展開する。

青年期のマルクスの研究の中で『資本論』の物神性論と関わるのは、「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』からの抜粋」(Marx [1968b]) に含まれる貨幣論である。以下の引用部分が、その代表的な個所である。

「貨幣の本質は、人間の生産物がそれを通じて相互補完しあうところの媒介的な活動や運動、つまり人間的・社会的な行為が、疎外されて、それが人間の外に存在する物質的な物の、すなわち貨幣の属性になっていることにある。…物と物との関係そのもの、物を操作する人間の作用が、人間の外に、しかも人

間の上に存在する実在の作用になっている。…この仲介者が今や現実の神になるのは明らかだ。」(Marx [1968b], S. 446, 邦訳, 364頁)

引用部分は、貨幣の本質を、人間関係が貨幣という物となって人間関係の外に存在するようになったもの、として捉えている。「仲介者が今や現実の神になった」の一言は、『資本論』の呪物崇拜の対象としての貨幣という認識と共通する。

初期マルクスと『資本論』では、問題関心が同じなのである。とは言え、この問題の解決は『資本論』まで持ち越される。物神性論の研究は、マルクスの生涯の研究テーマであったと言える。

### 2. 唯物史観と物神性論

疎外論的貨幣論には歴史的な分析視点は無い。貨幣が人間関係の疎外態として存在することは指摘できても、特定の時代の経済システムに対して持つ意味は説明できない。

この限界を克服するのが、唯物史観である。唯物史観は、『哲学の貧困』(Marx [1968a]) で基本的な視点が定まり、『経済学批判』(Marx [1961]) の「序言」で定式化される。

唯物史観にはいくつかの特徴がある。その中心は、社会を分析する視点を、政治体制ではなく経済的な基礎に置くことにある。経済的基礎とは、一般的な経済状況ではなく、経済をめぐる人間関係、いわゆる生産関係を中心としたものである。

唯物史観によれば、一定の時代を代表する生産力には一定の生産関係が対応する。資本主義を代表する生産力は機械制大工業であり、この生産力の下では、資本家と労働者の生産関係が対応する。

そうであるとする、貨幣はどのような生

産関係と対応するのか。貨幣の歴史は資本主義経済よりもはるかに古い。とはいえ、商品経済が社会全体を覆ったのが資本主義である。

ここで重要な役割を果たすのが、『1857-58年経済学草稿』(Marx [1976])である。一部は『経済学批判要綱』として刊行されていたが、いわゆる新MEGAの刊行により、『1857-58年経済学草稿』として草稿の全体が知られるようになった。

唯物史観は、先に示したように、経済的基礎、とりわけ生産関係から社会を分析する方法である。この場合、問題になるのは、商品や貨幣にどのような生産関係があるのかである。商品や貨幣は、流通の領域に属するものであり、資本主義経済の下で全面的に開花したとは言え、生産に関わるものではない。マルクスにとって、商品や貨幣と生産をつなぐ媒介項は価値や交換価値である。

マルクスは労働価値論を採用するが、古典派との違いは価値を生む労働に歴史的な条件を付けていることである。どのような労働が価値の実体となるのか。この草稿は、わかりやすい解答を出している。

「相互にたいして無関心な諸個人の相互的で全面的な依存性が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的連関は交換価値という形で表現されているが、各個人にとっては、彼自身の活動または彼の生産物は、その交換価値というかたちで初めて各個人のための活動または生産物となるのである。」(Marx [1976], S.90, 邦訳、第1分冊、136頁)

「交換価値においては、人格と人格との社会的関連は、物象と物象との一つの社会的関連行為に転化しており、人格的な力能は物象的な力能に転化している。」(Ibid., S. 90, 邦訳、同前、137頁)

先の引用が示すところでは、交換価値を媒介とする個々人は、互いに無関心でかつ全面的な依存関係にある個人である。

「交換価値と貨幣とによって媒介されるものとしての交換は、もちろん生産物相互間の全面的な依存性を前提とするが、しかし、同時に諸生産物の私利の完全な孤立化および社会的労働の分割をも前提とする。」(Ibid., S. 91, 邦訳、同前、138-139頁)

相互に無関心な個人は、流通面だけでなく、生産面、すなわち労働編成の在り方にもかかわる。これらの引用から言えることは、『資本論』の物神性論で大きな役割を果たす「私的労働」の概念が説かれているということである。「私的労働」という用語は用いられていないが、内容は十分に把握されている。すなわち、相互に無関心な私利のみを追求する労働が、市場における価値や交換価値を媒介に、商品や貨幣に依拠した生産編成を行う、ということである。

この認識のもとに、人類史3段階説とも呼ばれるべき歴史観が示される。『資本論』でいうところの「私的労働」に相当する概念を中心に、社会を3つの段階に区分するのである。

第1に、「私的労働」以前の社会形態として、「人格的な依存関係」(Ibid., S. 90, 邦訳、同前138頁)、社会。第2に、「物象的依存性の上に築かれた人格的独立性」(Ibid., S.91, 邦訳、同前、138頁)の社会、第3に、「共同体的社会的生産性を、諸個人の社会的力能として服属させることの上に築かれた自由な個性体」(Ibid., S.91, 邦訳、同前、138頁)の社会である。

この3段階区分は、価値や交換価値の時代である第2段階の社会を中心に行われている。

第1の時代が資本主義以前の社会、第2の時代が交換価値に媒介された社会あるいは資本主義社会、第3の時代が社会主義社会である。

「私的労働」として特徴づけられている社会には、さらに立ち入った指摘が行われている。すなわち、社会的分業が行われている社会であり、かつ私的利害が貫かれている社会である。次のように言う。

「交換価値が生産物の社会的形態として残っている限り、貨幣そのものを止揚することは不可能である。」(Ibid., S. 80, 邦訳、同前、139頁)

生産物が商品形態を取っている限り、商品を残して貨幣制度だけをなくすことはできない、ということである。

物神性論において重要な概念である「私的労働」は、『1857-58年経済学草稿』で事実上確立したと言える。

『1857-58年経済学草稿』をもとに出版された『経済学批判』(以下、『批判』と略記)には、物神性論に直接的に関わる考察はない。ただし、「私的労働」という物神性論を支えるキーワードは、『経済学批判』で登場する。とは言え、それが初めて登場するのは、『批判』の「第1章 商品」ではなく、「第2章 貨幣または単純流通」の中の「B 貨幣の度量単位に関する諸理論」の中である。

「諸商品は、直接には個別化された独立の私的労働の生産物であって、これらの私的労働は、私的交換の過程でその外化によってはじめて社会的労働となるのである。」(Marx [1961], Bd.13, S. 67, 邦訳、同前、107頁)

次に登場するのは、同じ第2章「2 流通手段」である。

「商品所有者たちが金という一つのを一般的労働時間の直接的定在に、したがって

貨幣に転化することによって、彼らの私的労働の生産物を社会的労働の生産物としてあらわしたように……。」(Ibid., S.82, 邦訳、同前、128頁)

『批判』での私的労働 *Privatarbeit* の用例は、この2つである。

他方、『批判』の中で *Fetisch* の用語が出てくるのは、『批判』第2章「貨幣または単純流通」第4節「貴金属」個所であり、商品論ではない(奥山 [2017]、参照)。すなわち、物神性論はまとまった論理としては、存在しない。

『批判』の最大の問題点は、価値と交換価値が用語上区別されていないのである。この用語上の混乱は、第2版『資本論』にも残っており、マルクスの指示に基づいてエンゲルスが編集した第3版で解消している。

『批判』の商品の2要因とは、「使用価値と交換価値」(Ibid., S.15, 邦訳、同前23頁)である。『資本論』の使用価値と価値に対応する。本稿に関わる論点は、交換価値を生み出す労働である。『批判』は、「交換価値を生み出す労働は、抽象的一般的労働である」(Ibid., S. 17, 邦訳、同前、27頁)、と言う。

そして、「交換価値を生み出す労働を特徴づけるものは、人と人との社会的な関係が、いわばさかさまに物と物との関係として表わされること」(Ibid., S. 21, 邦訳、同前、33頁)、である。

『批判』では、物神性論の分析視点は、交換価値を生み出す労働の社会的な条件として用いられていたと言える。

唯物史観の形成によって、資本主義的な生産関係の下での労働は、私的労働という抽象的な概念で表現される。『批判』では価値と交換価値の用語問題は抱えているとしても、

商品の社会的性格を規定する労働として、特定の歴史的な形態規定性が明らかになる。私的労働の概念は、商品と貨幣を資本主義的な生産関係とつなぐ理論的な道具となる。

### III 商品論と物神性論

#### 1. 商品の2要因

『資本論』の初版から再版にかけて、大きな変更点が見られる。いずれも物神性論と深く関わる。第1に、初版『資本論』(Marx [1959a])には、価値形態論が2つあり、その結論が異なる。すなわち、初版『資本論』本文の価値形態論の最後は、いわゆる第IV形態で終了する。現行版『資本論』では、拡大された価値形態が転倒して、一般的価値形態と一般的等価物が生まれる。一般的等価物が金になると貨幣形態(価格)が成立する。しかし、初版『資本論』本文では、現行版という拡大された価値形態(初本文では「拡大された相対的価値形態」)が複数ある状態から、それが転倒されて、一般的等価形態と一般的等価物が複数登場する。つまり、一般的等価物としての意味はない。つまり、価値形態論の展開によって一般的価値形態は崩壊し、貨幣形態は成立しないのである。

貨幣形態の成立は、初版『資本論』本文では、価値形態論ではなく交換過程論の課題とされる。初版では、価値形態論の課題は、価値と価値形態の関係を付けることに留まることが明言されている。

この認識は、交換価値と価値形態を同義語とし、価値概念のこれらとは別個のものとすることによって大きく前進する。すなわち、価値と交換価値は異なるのである。『批判』における商品の2要因は使用価値と交換価値であったが、それは廃棄される。価値と交換

価値は同じ概念ではないのである。『資本論』の改定が進むにつれて、便宜的にも価値を交換価値と呼ぶことはなくなる。

また、初版『資本論』には「付録価値形態論」が付けられていて、「付録」の方では、価値形態論の中で貨幣形態、すなわち価格の成立を見る。価格の背後には、一般的等価物の完成した姿である金貨幣が成立している。つまり、初版『資本論』には、2つの価値形態論があって、それぞれ結論が違うのである。

再版以降の価値形態論は、初版『資本論』本文ではなく、「付録価値形態論」を継承することになる。

この点と深く関わるのが、価値論論証が、初版から再版にかけて書き換えられたことである。マルクスの価値論論証は、一般に「蒸留法」と呼ばれている(奥山[2009])。この方法の成立は、価値形態論にとっては重要であり、価値形態論を通して、物神性論にも重要な変化をもたらす。

逆に言えば、初版『資本論』には蒸留法はない。労働価値論の論証も厳密に言えば存在しない。初版『資本論』では、2つの商品の交換関係を示す等号(=)から、2つの商品とは別の共通の第三者の存在が指摘されるだけである。これが労働に裏づけられた価値であるという論理は、論証の形式をとっていない。宣言されているだけである。

リカードウの影響が強かった時代の安易さかもしれない。ところで、リカードウの労働価値論は2面性を持つ。『経済学および課税の原理』では、価値の概念を労働時間の相対比と定義しているが、実際には、個々の商品に対して投下労働によって裏づけられた価値を想定している。これは労働価値論における、絶対価値と相対価値の問題である。マルクス

はこの問題を『経済学批判（1861－1863年草稿）』（Marx [1978]）の中で、リカードウ（David Ricardo, 1772－1823, Ricardo [1951]）とサミュエル・ベイリー（Samuel Bailey, 1791－1870, Bailey [1967]）とを共に批判する形で考察している。

結論は、リカードウのように価値を相対的な労働時間比とする労働価値論は不十分であり、個々の商品の価値を労働によって対応させる絶対的な労働価値論が必要である、と言うことであった。リカードウ的な労働価値論は、現在の『資本論』では、簡単な価値形態の中の相対的価値形態の量的規定性の中に吸収されている（奥山 [2009]）。

マルクスの価値論論証としての蒸留法は、2商品の交換関係の中から共通の第三者の存在を指摘し、次に1つの商品を取り出して使用価値を捨象し、残留物として抽象的人間労働を導き、その対象性として価値を規定するものである。マルクスの商品の2要因は、スミスの伝統からすると異端である。

スミスの使用価値は使用上の価値（value in use）であり、有用性である。他方、マルクスの使用価値は、二重の意味で用いられている。マルクスは有用性としての使用価値と商品の素材そのもの、すなわち商品体の2つを使用価値として用いているのである。価値形態論での使用価値とは、商品体としての使用価値である。商品体の意味での使用価値がなければ、価値形態論も物神性論も成立しない。社会的なものとの取り違え（quidproquo）の論理も成立しない。マルクスの古典派とは異なる使用価値と価値との定義が、価値形態論の展開を可能にし、物神性論に具体的な理論内容を提供したのである。

マルクスは、商品の2要因に対応して、労働の二重性論を展開する。価値の実体となる抽象的人間労働とは、労働の生理的精神的エネルギーの支出であり、すべての労働に共通する労働の性格である。これに対して使用価値を作る労働は、具体的有用労働と呼ばれる。価値を形成する実体となる労働は、抽象的人間労働と呼ばれる。

結論からすれば、私的労働という歴史的な形態の下での労働での抽象的人間労働が、価値を形成する実体としての労働になる。単に労働といった場合には、抽象的人間労働を指す。

再版以降の蒸留法の登場は、価値を個々の商品に内在する性格とし、交換価値を商品と商品の関係を表す用語とする。

この場合の価値とは、抽象的人間労働の対象性として定義される。しかし、商品の中への労働の対象性は、目に見えず、それ自体としては確かめようがない。この点では交換比率として目に見える交換価値とは基本的に異なる。商品に内在する絶対価値の存在が、マルクスに価値形態論の前進をもたらしたと言える。

絶対価値とは言っても、労働はどこでもいつでも価値を生むなどの思想的な宣言ではない。私的労働という歴史的な形態を帯びた労働が、価値を形成するという意味である。

この価値が、抽象的人間労働の対象性として、規定されたのである。しかも、個々の商品に内在する性格として把握されたのである。価値が目に見えるようになったのが価格であり、価格は金貨幣の登場を前提とする。

## 2. 取り違え quidproquo

私的労働の社会が、人間関係を商品や貨幣

というモノの関係として関係づけるという論点は、『1857-1858年草稿』以来、マルクスにとっては一貫した視点である。しかし、価値形態論の確立によって内容が進展する。これが物神性論に波及する。

価値形態論の要点は、一つの商品の価値が他の商品の使用価値によって表現されることにある。先に指摘したように、マルクスの使用価値は、有用性と商品体との二重の意味で使用されているが、価値形態論での使用価値は「商品体」のことである。つまり、上着なら上着そのもの、金なら金そのものである。上着の価値や有用性は、他の商品の価値の表現材料にはならない。他の商品の目に見えない価値の表現材料となるのは上着そのもの、上着の商品体である。商品体は商品の自然形態である。

初版『資本論』では、次のように言う。

「価値形態論について言えば、この形態こそは、まさに私的労働者たちの社会的諸関係を、したがってまた、私的諸労働の社会的な被規定性を、顕示するのではなくて、それらを物的に覆い隠すのである。」(Marx [1959a], S. 39, 邦訳、84頁)

「私的生産者たちにとっては彼らの私的労働の社会的な諸規定が労働生産物の社会的な自然的被規定性として現れる。」(Ibid., S.39-40, 同前、85頁)

一つの商品の価値は、その商品には現れることはなく、価値表現の材料となっている他の商品の自然形態としての使用価値として表れるのである。

初版『資本論』において価値形態論が成立するとともに、物神性論の焦点も明確になっている。初版『資本論』の物神性論の内容は、現行版『資本論』と基本的に同じであるが、

マルクスは再版『資本論』において大幅に拡充している。現行版『資本論』の物神性論では次のように言う。

「したがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらのものの社会的自然的属性として反映させ、それゆえにまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。この入れ替わり (quidproquo) によって労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物になる。」(Marx [1962], S. 86, 邦訳、第1分冊、123頁)

初版『資本論』の「付録価値形態論」では、ドイツ語で「転倒」を意味する *Verkehrung* を *quid pro quo* と同義語として用いているので (Marx [1959a], S.771, 邦訳、143頁)、マルクスの用法としては、「取り違え」等の訳語で問題はない。

この語は、価値形態論と呼応する。簡単な価値形態の等価形態に関する考察で、マルクスは次のように言う。

「等価形態の考察に関して目につく第1の独自性は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。商品の自然的形態が価値形態になるのである。だが、注意せよ。この入れ替わり *quidproquo* が1商品 B…にとって生じるのは、ただ、任意の他の商品 A…が取り結ぶ価値関係の内部だけのことであり…。」(Marx [1962], S.71, 邦訳、第1分冊96-97頁)

このような価値形態論での理解は、『資本論』の物神性論に反映する。



「したがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらのものの社会的自然的属性として反映させ、それゆえにまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。この入れ替わり (quidproquo) によって労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物になる。」(Marx [1962], S. 86, 邦訳、第1分冊、123頁)

価値形態論の成果が物神性論に取り入れられているのである。

#### IV 物神性論の古典派経済学批判

##### 1. 『資本論』の経済学批判

『資本論』のサブタイトルは、「経済学批判」である。批判の対象には、経済学の隆盛期を作り出した古典派経済学が含まれる。経済学批判としての『資本論』は、豊富な内容を持っている。

何よりも、自由と平等の市場を前提に剰余価値が作られることを、マルクスは、労働と労働力との概念を区別することによって、明確なかたちで論じた。「労働の価値」という古典派のあいまいな表現を労働力の価値と労働によってつくられた価値とを区別することで、剰余価値の存在を明確にしたのである。これによって、等価交換という自由と平等のシステムの中で、搾取関係が作られるという資本主義的な階級関係を明らかにしたのである。マルクスが、古典派経済学を超えた点である。

しかし、資本主義は、階級社会としての性

格が、人々の当事者意識の中には表れてこない。資本主義社会にいる人々、すなわち資本主義の当事者たちは、資本主義を自然で永遠なものとして受け止めている。資本主義は、自らの階級性や歴史性を隠蔽する仕組みを持っているのである。

この問題の解決に当たっているのが、物神性論(『資本論』第1部第1編第1章第4節)と三位一体的定式論(『資本論』第3部第7編第47章)である。

物神性論は、資本主義における当事者意識の形成を解明することによって、その転倒性を指摘することに課題がある。古典派経済学に対する批判は、古典派経済学もまた大きな功績を持つにもかかわらず、資本主義の当事者と同じような物神崇拜から抜け出していなかったということが、価値論や価値形態論を中心に大きな限界となっていることを批判したものである。

##### 2. 古典派と価値形態論

価値形態論は、『資本論』初版において登場し、大幅な修正のうえで再版において完成する。価値形態論の完成によって、一商品の価値は、生身の自然の金を自らの価値形態とすることが明らかになる。商品の価値という社会的な存在が、金の自然的な姿となって表れる。社会的なものとの取り違え (quidproquo) の論理が価値形態論において確立し、物神性論の論理に具体性をもたせる。金という自然素材がそのまま貨幣という社会性を持ち、机という自然の素材が、価格を付けることで資本主義的な富の基本的な形態となる。人々はそれを当たり前と思うが、マルクスの価値形態論と物神性論は、これが取り違えであることを明らかにする。

マルクスは価値形態論の課題に関して次のように言う。

「だれでも、他のことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な自然形態とはきわめていちじるしい対照をなす一つの共通の価値形態、すなわち貨幣形態を持っているということは知っている。しかし、今ここで成し遂げられなければならないことは、ブルジョア経済学に決して試みられることもなかったこと、すなわち、貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態に至るまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消え失せる。」(Ibid., S.59, 邦訳、第1分冊、82頁)

引用文は、価値形態論がマルクスと古典派経済学とを決定的に区別するものであるという明確な表明である。商品の価格の存在も金貨幣の存在も、誰でも知っている。誰でも知っていることを本質から解明することが、価値形態論の研究課題である。当事者意識がマルクスからすれば取り違えである。この取り違えのプロセスは、価値関係から価値形態が導かれ、最終的に貨幣形態にたどり着くことで明らかになる。

なお、引用文でいう貨幣形態とは、商品の価格のことである。貨幣形態の完成を論証することで、貨幣の謎も解ける、という時の貨幣は、金の現物としての貨幣である。

商品や貨幣という現に存在するものを論理的に再構築することが、ここでの「立証」の意味である。これがブルジョア経済学ではできなくなった、とマルクスは主張しているのである。

ここで指摘されているブルジョア経済学と

は、古典派を中心とした先行学説である。価値形態論の研究は、先行学説において全く行われていなかったと言うのである。その理由は、物神性論が担う課題となる。

### 3. 物神性論による古典派経済学批判

物神性論の視点からの古典派経済学批判は、資本主義の歴史的な性格を認識しているかどうかという点にある。この点では、マルクスによる唯物史観の形成と、市場と対応する形で作り出された「私的労働」という資本主義の歴史性を体現した概念が、古典派経済学批判として有効な役割を果たす。

物神性論の中で、マルクスは、「リカードウの価値の大きさの分析—しかもこれは最良の分析である—」(Ibid., S.96, 邦訳、同前、136頁)、と言う。古典派の功績は、否定しようもないことである。しかし、その古典派にどのような問題があったのか。マルクスと古典派の分岐点についてマルクスは、次のように言う。

「ところで、確かに経済学は不完全ではあるけれども価値と価値の大きさを分析して、この形態のうちに隠されている内容を発見した。しかし、経済学は、では、なぜこの内容がああ形態をとるのか、したがって、なぜ労働が価値に、またその継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに表されるのか？という問題を提起したことさえなかった。諸定式—すなわち生産過程が人間を支配して人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものであるということが、その額に書かれている諸定式は、経済学のブルジョア的意識にとっては、生産的労働そのものがそうであるのと同じぐらいに自明な自然的必然性であるとみなされるのであ

る。」(Ibid., S.95, 邦訳、同前、135-136頁)

ここでのブルジョア意識とは、資本主義のシステムを無批判に受け入れる当事者の意識を指し、経済学者もまた、当事者意識から抜け出していないことが批判されているのである。彼らは、労働価値論をとっていても、肝心の点、なぜ労働が価値に表されるのか、が理解できないと批判している。

マルクスからすれば、私的労働という歴史的な性格の労働が前提となって、抽象的人間労働(あるいは単純に「労働」)が価値を形成する実体となる、ということである。物神性論の基本的な考え方が、古典派の労働価値論批判につながっているのである。

マルクスは、物神性論の中で、古典派経済学に価値形態がなかったことが、決定的な問題であると指摘する。

「古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが商品の分析、ことに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にする価値の形態を見つけ出すことに成功しなかったことである。A. スミスやリカードのようなその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもいいものとして、あるいは商品そのものの本性にとって外的なものとして、取り扱っている。その原因は、価値の、大きさの分析にすっかり注意を奪われてしまっていたというだけではない。それはもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式のもっとも抽象的な、しかしまた最も一般的な形態であり、ブルジョアの生産様式はこの形態によって一つの特殊な種類の社会的生産として、それゆえまた同時に歴史的なものとして、性格づけられている。だから、人がこの生産様式を社会的生産様式の自然的形態と見誤るなら

ば、人は必然的に等価形態の独自性を、商品形態の、進んでは貨幣形態、資本形態等々の独自性を見落とすことになるのである。」

(Ibid., S. 96, 邦訳、同前、137-138頁)

価値概念の歴史的な性格を把握できないことは、価値形態、すなわち価格(貨幣形態)、資本形態、などの資本主義の歴史的な性格を表現する形態論全体を分析できないことにつながる、と批判しているのである

したがって、資本主義的な生産を自然のものと認識していれば、それが歴史的な形態規定性を帯びていることに気づかない。古典派経済学に価値形態論がなかったのは、資本主義を自然的な生産様式とし、歴史的な特定の社会として見る視点、すなわち物神性論の視点がなかったからである、というのが物神性論の観点からの古典派批判である。

マルクスによって把握された価値の概念が、価格と関係づけられる。すなわち、価値形態論によって、自然の姿の金そのものが一般的購買力を持つ貨幣となり、これと共に商品が価格という社会的形態を身に付ける。価値が価格として現象するのである。現象はそのままでは認識できず、現にあるものを歴史的形態として認識する視点が必要なのである。古典派経済学の限界は、資本主義を歴史的なものとして把握する視点を持たなかった点にあり、このために現象から本質を見抜くことも、現象を本質から説明することができなかった。これが物神性論による古典派経済学批判である。

## 結 語

マルクスは、物神性論の中で、次のように言う。

「商品形態は、ブルジョアの生産の最も一

般的な未発展な形態であるから、……その物神的性格は、まだ比較的たやすく見抜けるようにみえる。もっと具体的形態の場合には、簡単であるという外見さえ消え失せる。重商主義の幻想はどこから来るのか？重商主義は、金銀を見ても、貨幣としての金銀は一つの社会的生産関係を、しかも奇妙な社会的属性を帯びた自然物という形態で、表示するのだということを見て取ることができなかった。また、お高くとまって重商主義を冷笑している近代の経済学は、それが資本を取り扱うや否や、その物神崇拜は手に取るように明らかになるのではないか？地代は土地から生じるのであって、社会から生じるのではないという重農主義的幻想が消えてから、どれだけたつたのであろうか。」(Ibid., S.97, 邦訳、同前140-141頁)

商品や貨幣の物神性は、自然物でありながら社会的属性を帯びていることにある。しかし、物神性は、この枠を超えて進展している。資本に関する物神性が、物神性の進展した局面であることに言及されている。『資本論』の第3部第48章「三位一体的定式」が置かれている。三位一体とは、キリスト教の神とキリストと精霊に関する教義である。マルクスは、これを資本-利潤、土地-地代、労働-賃金と対応させ資本主義の当事者意識を説明する。

マルクスは『資本論』の第1部において剰余価値論を説き、資本主義の階級関係を明らかにする。労働者は、自分の生活資料に必要な部分を超えて労働し、剰余価値を作り出す。剰余価値が利潤や地代として、資本家や地主に分配される。しかし、資本主義社会に生活する人々の意識には、資本が利潤を生み、土地が地代を生み、労働が労働力の価値ではな

く、「労働の価値」として労働者に支払われるように見える。

さらに資本は、利子生み資本の存在によって、利子と対応し、利潤の中で利子以外の部分は、資本家の労働に対応する企業者利得として受け止められる。資本主義の階級関係を示す剰余価値は、資本主義の中にいる人々の意識からは消える。資本主義の現象の世界からは、本質は隠蔽される。俗流経済学も古典派経済学も、資本主義の下での当事者意識に取り込まれている、と言う。

三位一体的定式の考察は別稿に譲るが、この理論は物神性論の延長上に展開されている。経済学批判としての『資本論』の重要な論理となっている。

#### 参考文献

- Bailey, Samuel [1967], *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, rpt. Augustus M. Kelley. 『リカード価値論の批判』、鈴木鴻一郎訳、日本評論社、1948。
- Hume, David [1955], *Political Discourses*, 1752, *Writings on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, University of Wisconsin Press. 『経済論集』、田中敏弘訳、東京大学出版会、1967。
- Locke, John [1963], *Works of John Locke, Vol. 5, 1823*, rpt. Scientia Verlag Aalen. *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money*, 1692. 『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978。
- Further Considerations concerning Raising the Value of Money*, 1695. 『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978。
- Marx, Karl [1956] *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 1. 「ヘーゲル法哲学批判」、『マル

- クスーエンゲルス全集』、第1巻、大月書店、1959。
- [1959a], *Das Kapital, Band I, Kritik der politischen Ökonomie*, first edition, Verlag von Otto Meissner Hamburg, 1867, rpt. 青木書店。『「資本論」第1巻初版』、岡崎次郎訳、国民文庫、大月書店、1976。
- [1959b], *Das Elend der Philosophie, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd.4. 『哲学の貧困』、『マルクスーエンゲルス全集』、第4巻、大月書店、1960。
- [1961], *Zur Kritik der Politischen Oeconomie, Marx-Engels Werke*, Bd.13. 『経済学批判』、杉本俊朗訳、大月書店、国民文庫、1966。
- [1962], *Das Kapital, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 23. 『資本論』、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、第1-13分冊、1982-1989。
- [1968a], *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 40. 『経済学哲学手稿』、『マルクスーエンゲルス全集』、第40巻、大月書店、1975。
- [1968b], *Auszüge aus James Mills Buch "Éléments d'économie politique" Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 40. 『ジェームズ・ミル『政治経済学批判要綱』からの抜粋』、『マルクスーエンゲルス全集』、第40巻、大月書店、1975。
- [1976], *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, Dietz Verlag, Berlin, 1976, 『1857-58年の経済学草稿』、資本論草稿翻訳委員会訳、『資本論草稿集』①-②、大月書店、1981-1993。
- [1978], *Zur Kritik der Politischen Oeconomie (Manuskripte 1861-1863)*, Dietz Verlag, Berlin, 1976, 『経済学批判 (1861-1863年草稿)』、『資本論草稿集』④-⑨、資本論草稿翻訳委員会訳、大月書店、1981-1994。
- Massi, Joseph [1912], *The Natural Rate of Interest*, 1750, A Reprint of Economic Tracts Edited by Jacob H. Hollander, The John Hopkins Press.
- Petty, William [1899], *Political Arithmetick*, 1690, *The Economic Writings of Sir William Petty, Vol. I*, Cambridge University Press, 『政治算術』、大内兵衛訳、岩波文庫、1955
- Ricardo, David [1951], *On the Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge, University Press, Vol. 1. 『経済学および課税の原理』、『リカード全集』第1巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970。
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Liberty Fund, in Dianapolis. 『国富論』、水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2001。
- Turgot, Anne Robert Jacques [1972a], *Reflexion sur la formation et la distribution des richesses*, 1766, *OEuvres de Turgot*, Vol. 2, rpt. Verlag Detlev Auverman, 『富の分配と形成に関する省察』、『チュルゴ著作集』、津田内匠訳、岩波書店、1962。
- [1972b], *Value et Minaies, 1769?*, *OEuvres de Turgot*, Vol. 3, 『価値と貨幣』、『チュルゴ著作集』、同前。

## 日本語文献

- 奥山忠信 [2009]、『貨幣理論の形成と展開—価値形態論の理論史的考察』、社会評論社。
- [2016], *Value of Money and Money as Wealth : An extension of the Theory of Value-Form* 政策科学学会『研究年報』、第6号、2016年3月、1-18頁。
- [2017]、『物神性論の形成』、『埼玉学園大学紀要・経済経営学部篇』、第17号、2017年。